

文様染の系譜 (1)

日本の捺染史を以前から書きたいと思っていたが、此の度色染物質会からお話を頂き、色染物質会のホームページに連載させて頂くことになった。月1回1200字位の原稿を10カ月書き続けてみたい。

日本の捺染について語る時、気の遠くなる様な、長い年月を費やして、育まれて来た文様染の系譜を無視することは出来ない。換言すれば、捺染の潜伏期間について語ることになる。

我が国は稀有の幸運に恵まれ、多くの染織品が、理想的な環境で保存されている。とり

わけ正倉院御物には、文様染の系譜を紐解く資料が凡て揃っている。即ちさいえ彩絵、すりもん摺文、ろう藤

けち纏、こうけち纈、きょうけち纈の5つである。

彩絵は紙や板に絵を描く様に、布地に顔料を使って絵を描いたもの。朱、金、銀、胡粉、雲母、墨等を使って描いたもので、最も基本的な文様の表現方法である。唯布の上に表現する場合、それは文様であって、絵画であってはならない。つまり使用目的に応じて、描かれた文様は工芸品であって、個人の感情のままに、自由に、制約無しに、描かれた美術品とは、自ずと区別される。

摺文は版木の表面に、顔料若しくは染料、場合によっては媒染剤を斑なく塗り、その上に布を静かに拵げて「ばれん」のような物で、均等に布の裏から摺って、文様を布にうつす。これは版木と布の位置が逆で、木版捺染（ブロックプリント）とは言い難い。この場合、多色の連続文様を印捺することには障害があって、現存するものは、殆んど単色であるらしい。

三纈、さんけちと読むことを学生時代、染織史の大家、明石国助（染人）先生に習った。辞書にはそのような読みはない、正倉院語らしい。三纈は後述するように、悉く防染法に

よって、文様を表現する。文様染表現の翳陽当論からすれば、陽当の中に翳を挿す贅沢な染色法で、我々日本人はこの文様の表現方法に現代に至るまで、拘り続けて来た。

藤纈染、ろうけちそめと読む。蠟を使って染めるのだから、蠟纈染と書けばよい物を何故かこう書く、此れも正倉院語。インド起源の染色法であろう。溶融した蜜蠟を木版につけ捺印し、低温で染色する。多色の場合は、乾燥して、又別型で溶融した蜜蠟を印捺して、別色に染め、この作業を繰り返す。此の時代では未だ、注蠟器は使っていない。



あしぎぬ
緑地小四弁花文藤纈 絶 第 36 回正倉院展目録



麒麟鳳凰ローケツ染屏風 京都工芸繊維大学美術工芸資料館 (AN.9999 (仮))

此の染色方法は、我が国の染色界に定着し、高度の技術を会得した様だが、平安時代遣唐使が廃止され、蜜蝋の輸入ルートが途絶えると、全く製造されなくなった。嘗て、京都工芸繊維大学の記念祭で、色染科が出すロウケツコーナーは大変な人気であった。原料資材は殆んど、先輩に寄付して頂くので、大儲けしたことは、懐かしい思い出である。溶融した蝋を筆に含ませ、ナフトールを下漬けした綿布に、絵や字を描いて防染と

顔色を同時に行う安易な染色方法である。このクラックをふんだんに入れた染色方法を開発したのは、色染科の先生で、後に学長も務められた鶴巻鶴一先生の偉業である。その記念すべき作品が母校の美術工芸資料館に蔵されている。



牡丹唐獅子ローケツ染（屏風 2 枚折）京都工芸繊維大学美術工芸資料館（AN.2693）



はなだじ あしぎぬ
縹地唐草花鳥文夾縵 絁 第 38 回正倉院展目録

夾纈染、板締め染とも言う。二枚の板に左右対称に文様を彫刻し、布を畳み、二枚の板の彫刻の凸面で、上下から強く挟み、染色する方法で、布の畳み方によって、文様の展開の仕方が、変わる所が面白いとされている。此の方法は江戸時代に発展し、現在に及んでいる。普通単色物だが、縞柄なら多色の物も出来る。

纈染、は現在の絞り染めや、括り染めと変わりなく、中国から伝えられたものだが、その源はインドであろう。正倉院御物の中で前二つは沢山あるが、それらに比し、纈染は少ない。唯これが技術的に修練されたのは、室町時代で、それ以後、室町時代を経て、

江戸時代に至り、特異な発達を遂げる。^{ますめゆい} 注目結、鹿子絞り、匹田等の特技を生み、世界に類を見ない、独自の文様染を創出した。

文様染と言えば、以上書き連ねた様なものを連想するが、糸を束ねて、括る、結ぶ、挟むなどして染色することもあるが、ここでは割愛する。

引用文献

1. 染織史考 明石染人 (株)思文閣出版 昭和52年10月復刻
2. 琉球紺と紅型 岡村吉右衛門 衣生活研究会 昭和46年1月
3. 第36回 正倉院展目録 昭和59年 奈良国立博物館 (株)便利堂
4. 第38回 正倉院展目録 昭和61年 奈良国立博物館 (株)便利堂

5. ^{きれじ} 裂地を辿る

京都工芸繊維大学美術工芸資料館染色関連資料調査研究会報告
2003年3月 編集 佐々木良子

(昭28・色染 萩原理一)